荒尾市立府本小学校　校長便り　№１０３

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年6月5日(金)

【徒然】運を味方に

よく聞く言葉「運が良かった（悪かった）。」結局のところ、運を味方にする人は、日頃の小さな行いの積み重ねができる人なのではないか。

例えば、挨拶はどうだろう。挨拶をする人としない人とでは、全く印象が違う。日頃から挨拶をして、印象が良い人に何かと関りを持ちたくなるのは、私だけではないと思う。関りだけでなく、「何かお手伝いすることはないだろうか。」とか「応援したい。」という気持ちになる。周りにそんな「支援者」が増え、そういうことの積み重ねが、総合的に考えて「運」になるのではないだろうか。

運を味方にする行動は他にもある。「笑顔」もその一つだ。笑顔そのものが持つ力は計り知れない。「挨拶」と同様に「運」を味方にできると思う。その他にも「時間を守ること」、「ルールを守ること」、「約束を守ること」…、運を味方にするためにやれることはたくさんありそうだ。こうして考えていくと、運を味方にするための視点をまとめると「凡事徹底」にたどり着く。

自分は運が悪いとか運命だから仕方がないとマイナス思考になる前に、自分のこれまでの姿を振り返ることが必要なようだ。私は若い頃、マイナス思考のスパイラルで卑屈な青春時代（みんなの居場所バックナンバー参照）を送った。そんな思考で、凡事徹底ができていない状態では、「運」など掴みようがない。

壁に突き当たった時ほど、普段の生活をしっかり送ること、凡事を徹底していくことが、運を味方にする近道の様な気がする。

【雑感】真面目さは認められる

ある日、担任させて頂いた教え子から電話がありました。出産の報告でした。この子は小学校時代から真面目で彼女は1高校からの推薦で、国立0女子大学に進み、東京都庁へ就職しました。とても幸せな毎日を送っているようで、元担任としても嬉しい限りです。

彼女の印象として是々非々の考え方ができると共に、自分を客観視することができるという子でした。彼女が6年生当時、やんちゃな男の子たちに注意する場面が多かったのですが、その注意の仕方がすごいものでした。

「ねぇあんたたち、恥ずかしくないと?」

「それでいいと?」

「やんなくちゃいけないことはやろうよ。」

私たち教師がするような声かけを当時の彼女が行っていたのです。男の子達は彼女の前では黙るばかりでした。そういう司令塔的な役割、学級のルールや規則の番人的な役割をしてくれていました。

彼女の成長過程を見ていて感じたことは、「受験で高得点が取れれば良いということではない」、「一生懸命頑張っていればそれを評価する人がいる」、「努力が報われる」ということです。学力もさることながら、普段の生活態度、言動、人当たりも良かったですね。高校から大学へ推薦する場合、「この子なら大丈夫!」と太鼓判を押して送り出す訳ですから、真面目でない子や客観性のもてない子では推薦などできません。言葉遣い、身なり、考え方、部活、友達関係、欠席日数、健康、性格面、生徒指導上の参考事項…、数え上げたらきりがありません。一言で言えば、多くのことに真摯に取り組むことが大切なのです。最後に、私が経験的に学んだ真理、それはこうです。「真面目さ、真摯さ、謙虚さ、感謝の心を忘れたら、自分の可能性を潰す。」中学校からは特にそれを感じるはずです。小学校から、自分を律することが重要なのです。

シリーズ「自分を語る」#103

いよいよ国際課、最後の日です。次の担当者への引継ぎがぎりぎりまで続き、3月末まで出勤していました。残務処理が一段落して、課長に挨拶、国際課職員一人一人に挨拶をして、最終日の勤務が終了しました。淋しさが勝っていましたが、久しぶりの学校ですので、それに対する嬉しさもありました。しかしいよいよ最後の時、課員が見送ってくれます。中国の国際支援員は涙を流して見送ってくれて、思わず貰い泣きする場面もありました。国際課勤務で知り合った県庁マンや、多くの関係機関とその職員との繋がりは、私の貴重な財産であり、今後もその繋がりを大切に生きていくことでしょう。

さて、4月1日、辞令交付式。その現場で校長先生に挨拶をして、伊倉小学校へ行き、打ち合わせ。当時の教頭先生に挨拶し、また打ち合わせ。当時の伊倉小学校はとても元気で、賑やかな学校でした。何に対してもやる気満々の子ども達でしたが、やる気をうまく制御できていない状況があり、それを良い方向へと導くことが私に託された仕事でした。で、先ずは情報収集となっていく訳です。学校長との面談の日、すぐに伝えられていた仕事は「6年担任」と「体育主任」でした。更に、併せて指示を受けたのは「新6年生に気持ちよく卒業式を迎えさせてくれ!」ということでした。そこから当該学級の情報収集を行う訳ですが、あまり良い情報は聞かれませんでしたので、先入観を一旦リセットして子ども達との出会いに備え、家庭訪問を行うことにしました。家庭訪問と言っても限られた家庭だけです。新6年生の兄弟で、以前担任させて頂いたことのある児童の家庭に限るのです。お隣様で多くの情報が手に入りました。

出会いの日です。始業式で担任発表があった後、教室へ。子どもに迎合してはいけません。是々非々と不易を通すことから始めることが重要であり、ここ数日考えていたことを、ストレートに子ども達にぶつけました。言葉も心の叫びそのものを使いました。

「こんちは。名前はもう知っとっど?　澤田。お前達、去年、相当悪さしたっだろ?　ヤンチャすっともよかばってん、人の道から外れんなよ。もし、そぎゃんこつがあれば、俺がヤンチャすっけん、そんぐらいの覚悟でヤンチャせぇ。何か聞きたいことはあっか?」

「シーン…」

このクラスに関わった職員は、妙なことを口にしていました。「このクラスの子たちは、机が並べられません。」「授業中は、私語と立ち歩きが日常的にあります。」「授業がチャイムと同時に始まることはありません。」6年生という発達段階では、私の経験的に、まずあり得ないことでしたね。教室の床に机を並べるための印が書かれていて、「オイオイ…」って感じでした。そんな職員に言言しました。「1週間、私だけに時間をください。自治の下地を作りますので。」当時の職員は「本当にできるの~?」と懐疑的でした。そんな姿を見ると余計に「やってやる!」と闘志が沸く澤田でした。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）